

《ストックレー・フリーズ》制作プロセスにおけるクリムトとウィーン工房の協働について 鈴木智子（京都工芸繊維大学）

本発表では、グスタフ・クリムト(Gustav Klimt, 1862-1918)の下絵による《ストックレー・フリーズ》を取り上げる。特にクリムトとウィーン工房の協働による制作プロセスに注目することで、クリムトとフリーズに対して新たな像を検討したい。

1903年、ベルギーの実業家アドルフ・ストックレーは、自邸の建設に関する仕事の一切を、ヨーゼフ・ホフマン(Josef Hoffmann, 1870-1956)とコロマン・モーザー(Coloman Moser, 1868-1918)によって設立されたウィーン工房に依頼した。邸宅は依頼主の美術的嗜好と上流社会的な生活様式に合わせ、最高級の素材と職人たちの優れた技術によって仕上げられている。またストックレー夫妻の美術コレクションと合わせて同時代の芸術家たちの作品が展示され、例えばホールの泉にはジョルジュ・ミンネの彫刻が、音楽と演劇の部屋にはフェルナンド・クノッフの絵画が掛けられた。そしてクリムトは、食堂のための壁画を担当したのであった。

この壁画は部屋の三面を飾る巨大なもので、原寸大の下絵がオーストリア応用美術館に所蔵されている。下絵といっても鑑賞に堪えうるほど美しいもので、フリーズが一般公開されていない現在、単独の作品としての様相をますます強めていると言える。フリーズの平面上の表現については、他のクリムトの作品やスケッチとの関連性、日本美術、エジプト美術からの影響が指摘されており、「黄金様式」の頂点を飾る作品として評価されている。一方で、フリーズ自体の在り方、制作プロセスと建築空間との関係は不明な点も多く、特に後者に関しては近年の研究によってようやく明らかになってきた。

クリムトは自身の芸術家としてのキャリアを建築装飾画家としてスタートさせており、他にもウィーン大学大講堂のための天井画、第14回分離派展に出品した《ベートーヴェン・フリーズ》を手がけている。《ストックレー・フリーズ》がこれらの作品と大きく異なることは、作品はクリムトの手を離れ、ウィーン工房の職人たちによって完成させられたということだ。現在目にすることができるフリーズのカラー写真を見れば、クリムトの下絵と完成品との違いは明らかである。このような素材に置き換える上での変化はクリムトがすでに想定していたことなのか、それとも職人たちの自由な発想によるものなのかははっきりと分からない。しかしウィーン工房との協働によって、クリムトの空間装飾に関する才能が大いに刺激されたことは間違いない。制作に関してクリムトは空間的な効果を配慮し、また壁画が食堂に設置されたときにはその空間においてクリムトの想定外の印象が生まれていた。これはクリムトにとって協働抜きにしては得られないことができない経験であった。官能の画家、金色の画家は、確かにクリムトの一側面ではある。しかし、画家には収まらないクリムト像が他にあるのではないだろうか。《ストックレー・フリーズ》をめぐる協働関係からその姿に迫ることが本発表の目的である。